

# 十訓抄における希望表現について

柴田 昭二  
連 仲友

## 目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

### 一、はじめに

本稿は、別稿<sup>①</sup>を受け、十訓抄を研究資料として、それにおける希望表現<sup>②</sup>の実態を説明しようとするものである。

十訓抄について「日本古典文学大辞典」<sup>③</sup>を参考にしながらその概要を纏める。十訓抄はその序に示すように、少年の類いに善を勧め悪を戒めるための啓蒙書である。同じ序にその成立は建長四年（一二五二）十月中旬であると示されているが、編者は定かでない。その構成は三卷十編からなり、十編の徳目を挙げてそれぞれの徳目に相応しい説話を類聚的に並べる。啓蒙書という編集方針に沿い漢籍や国書の文献からの引用も、少年の類いに読みやすい文章で纏めている。これは十訓抄の文体上の特徴と言えよう。その伝本は四種に大別され、すなわち、第一類 三

卷有欠本、第二類 片仮名三卷本、第三類 補欠諸本、第四類 流布板本、とされる。

テキストには、小学館刊新編日本古典文学全集『十訓抄』<sup>④</sup>を用いる。その底本は前述、第二類本の宮内庁書陵部蔵片仮名三卷本である。

### 二、希望表現の構成形式

十訓抄における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれの用例数は以下の通りである。

「欲」	(五例)
「〜ムト思フ」	(二二例)
「願」	(一一例)
「ネガフ」	(五例)
「コヒネガフ」	(四例)
「願ハクハ〜」	(三例)
「ホシ」	(一例)
「ホシガル」	(三例)

- 「望ム」 (二四例)
- 「祈ル」 (六例)
- 「乞フ」 (二七例)
- 「請」 (四例)
- 「求ム」 (一四例)
- 「アツラフ」 (二例)
- 「庶幾ス」 (一例)
- 「バヤ」 (七例)
- 「モガナ」 (四例)
- 「テシガナ」 (二例)
- 「ナム」 (一例)
- 「マホシ」 (六例)

希望表現の構成形式では、名詞は「欲」「願」のみであるが、基本形で掲げている「ネガフ」「望ム」「祈ル」の連用形も広義の名詞用法である。形容詞は「ホシ」の一例のみであるが、それ以外に接尾語「ガル」と複合動詞を構成する用例が三例見られる。内心の希望が外に現れている行動としてとらえる動詞は「ネガフ」「コヒネガフ」「望ム」「祈ル」「乞フ」「請」「求ム」「誂フ」「庶幾ス」が見られるが、そのうち「望ム」「乞フ」「求ム」が多用されている。

注目されるのは、希望を表す慣用形式と希望を表す終助詞・助動詞形式の存在である。ここでいう慣用形式とは「ムト思フ」と「願ハクハ」である。「ムト思フ」が二例見られ、「願ハクハ」は三例見られる。希望を表す終助詞には「バヤ」「モガナ」「テシガナ」「ナム」、助動詞には「マホシ」が見られる。これらの形式は内心的希望の心情を表すものである。以下に詳細に述べる。

### 三、各形式の用法

#### 1、「欲」「ムト思フ」の用法

まず、漢字表記の「欲」の用法を見よう。全五例はいずれも名詞用法である。

- (1) 「世の末には、神も仏も欲の深くおはしますぞとよ」といひて (四ノ四 一六〇頁)
- (2) そうじて、ものにへつらひ、欲にすすみ、虚言をかまふるものは、盗みをするたくひ、 (六ノ二十九 二六一頁)

例(1)(2)における「欲」は名詞で、単純に「欲望」の意味を表す。

次に、「欲」の訓読に關係する語法として「ムト思フ」の用法を見よう。

- (3) 都にも恋しき人のあまたあれば なほこのたびはいかむとぞ思ふ (一ノ四十五 九四頁)
- (4) 「この種を、わが宮に移さむと思ふ」とのたまはせたりければ、 (七ノ一 二八六頁)

例(3)は和歌における例で「この度(旅)はもう一度行きたい」の意、例(4)は会話文における例で「この種を私の宮殿に移し植えたい」の意と解され、何れも話主の「願望」<sup>(6)</sup>を「表出」<sup>(7)</sup>する用法である。このような「願望」の「表出」の用法は十訓抄に八例用いられている。

(5) 女なれども、身にかはり奉らむと思ふ志深かりけり。

(六ノ三 一一三頁)

(6) 大夫、笛を取らむと思ふ心の深さにこそ、さまざまかまへけれ。

(七ノ二十五 三二七頁)

例(5)(6)は連体修飾の用法である。「身に代わりたいと思う気持が」「笛を奪い取りたいと思う心が強くて」の意と解され、何れも動作主の「願望」を「説明」する用法である。

(7) しばしまどろみたる夢に、生身の普賢を見奉らむと思はば、神崎の遊女の長者を見るべきよし見て、夢さめて、

(三ノ十五 一三九頁)

例(7)は二人称に対する仮定形の形である。「生身の普賢菩薩を拝見したいと思うなら、神崎の遊女の女主人を見るがよい」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(8) 叔斉、世を遁れむと思ひ立ちしより、周の粟を受けずして、その  
歯白かりき。  
(六ノ二十九 二六〇頁)

(9) 趙高は二世の代を奪はむと思ひ立ちけるに、鹿をさして、馬として  
奉りて、身の感応のほどを知りにけり。  
(七ノ二十七 三三三頁)

例(8)(9)は地の文で三人称に用いる用例である。「叔斉は俗世間から逃れたいと思って」「趙高は二世皇帝の代を奪いたいと思って」の意と解され、これらも「願望」を「説明」する用法である。このような「願

望」の「説明」の用法は十訓抄に一四例用いられている。

## 2、「ホシ」「ホシガル」の用法

(10) 行なひをつとめて物のほしければ 西をぞ頼むくるかたとは

(十ノ四十九 四三九頁)

例(10)は和歌における「ほし」の例で、「物が欲しくなるので」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。この「ほし」の用例は一例のみ見られる。

(11) この父、朝夕、あながちに酒を愛し、ほしがる。

(六ノ十八 二四〇頁)

(12) なかんづく、わが身はたくはへ持ちながら、銭をほしがり、あたひあらば、いくらも買ふべきものをも、力をいれじとて、

(六ノ二十九 二六一頁)

例(11)(12)における「ホシガル」は形容詞「ホシ」に接尾語「ガル」が付く複合動詞である。形容詞「ホシ」が内心の希望を表すのに対して、動詞「ホシガル」は内心の希望が外に現れて、それぞれ「酒をほしがる」「銭をほしがる」という具体的行動を表す表現である。この「ほしがる」の用例は三例見られるが、用法は同じである。

## 3、「願」「願フ」「願ハクハ」の用法

まず、名詞用法の「願」の用法を見よう。

(13) 「この意をや御願文に載せらるべき」と、 (五ノ十六 二〇三頁)

(14) 願主喜びて供養をのぶる時、 (六ノ二十六 二五四頁)

例(13) (14)における「願文」「願主」は何れも字音語で、仏教の特定概念を表す熟語形式である。

次に、和語の「願ヒ」「願フ」「コヒネガフ」の用法を見よう。

(15) 「なにことにても、ねんごろなる御願ひあらば、一ことかなへ奉らむ。」 (一ノ七 三九頁)

例(15)における「願ひ」は、「願フ」の連用形名詞法で、「どんなことでも、心からの願いがあれば」の意と解され、一般的な希望の概念を表すものである。

(16) 「われ、極楽を願ふ志深く侍り。」 (六ノ三十八 二七五頁)

(17) 「年ごろ、心中に願ひつることなり。しかるべき仏神の御しるべ」 (七ノ二十四 三三二頁)

(18) 「人は良き友にあはむことをこひねがふべきなり」

(五ノ序 一八一頁)

(19) ただ傾城の色にあはざらむことを、こひねがふべし。

(九ノ五 三七七頁)

例(16) (17)は「願フ」の用例、例(18) (19)は「コヒネガフ」の用例で

ある。両者は「いづれも」を希望する」という意を表す動詞用法である。

次に、「願ハクハ」の用法を見よう。

(20) 「願はくは、わが申さむままにかまへ給へ。君の敵、亡さむ」といふ。 (一ノ六 三三三頁)

(21) 「願はくは、朝に参りて、その罪なきことを訴へ申し給へ。われ、大臣にかはりて誅せられむ」とて、 (六ノ十五 二三〇頁)

(22) 琵琶をひきすまして、願はくは、今生世俗文字の業 といふ朗詠をし給ひたりければ、 (十ノ二十三 四一二頁)

例(20) (21)の構文は同じ構文である。すなわち、「願ハクハ」給へ」の形で他者に対する希望を表す。これは「希求」を「表出」する用法である。この用法は二例見られる。

例(22)は「願ハクハ」のみで後接の命令形または「ム」が見られないが、これは「白氏文集」からの部分引用であり、原文では「狂言綺語の誤りもて、翻して、当来世々讚仏乗の因、転法輪の縁とせむ」と続く。これは「願望」を「表出」する用法である。この用法は一例のみ見られる。

#### 4、「望ム」の用法

(23) 「われはこの世の望み、さらになし。」 (一ノ七 三九頁)

(24) すべて及ばぬほどの身なれども、芸能につけて、望みをとげ、賞をかぶるもの、古今数を知らず、多し。 (十ノ五十 四四〇頁)

例(23) (24)における「望み」は動詞「望む」の連用形名詞法である。

(25) その禄を望む族は、深く退くべし。 (十訓抄序 二四頁)

(26) 「臣が兄武内、つねに天下を望む心あり。」 (六ノ十五 二三〇頁)

例(25) (26)における「禄を望む」「天下を望む」は動詞「望む」の基本的用法である。

(27) すみやかに参りて、御所望のこと申して聞かせ奉らむ」とて、

(七ノ二十八 三三八頁)

(28) さだめて、上は天意に達し、下は人望にかなはむものをや。

(十ノ七十九 四九一頁)

例(27) (28)における「所望」「人望」は熟語形式で、「望むところ」「人の望み」の意と解され、名詞用法である。

## 5、「祈ル」の用法

(29) 「御いひたがへ、つねにありと聞ゆれば、まことにや、御祈りのあるぞや」といはれければ、

(一ノ三十九 八三頁)

(30) かはらむと祈る命は惜しからで、さても別れむことぞかなしき

(十ノ十五 四〇二頁)

例(29)における「祈り」は連用形名詞法であり、例(30)の和歌における「祈る」は動詞用法である。

十訓抄における希望表現について

(31) 書写の性空上人、生身の普賢を見奉るべきよし、寤寐に祈請し給ひけるに、(三ノ十五 一三九頁)

例(31)における「祈請す」は熟語形式でサ行変格活用動詞用法である。

## 6、「乞フ」の用法

(32) 「この乞者は三形沙弥なり」と、人いひけり。

(三ノ六 一二八頁)

例(32)における「乞者」は「物乞いをする僧、托鉢の僧」の意であり、特定の概念を表す名詞用法である。

(33) つねにこれを乞ひて、父を養ふ。

(六ノ十八 二四〇頁)

(34) 襖といふものを乞ひて、さて参りけり。 (十ノ四十三 四三三頁)

例(33) (34)における「酒を乞ひて」「服を乞ひて」は動詞用法である。

## 7、「請」の用法

「請」はいずれも熟語の形で用いられている。

(35) 薬師十二の請願は 衆病悉除ぞたのもしき (十ノ十七 四〇五頁)

(36) 慈恵、このことを聞きて、憤りて、起請を書きて、三塔に披露せ

らる。

(四ノ七 一六四頁)

(37) 北野に參籠して、「この恥をすぎ給へ」と起請して、

(四ノ六 一六二頁)

例(35) (36)における「請願」「起請」は熟語名詞用法であり、例(37)における「起請して」はサ行変格活用の動詞用法である。

## 8、「求ム」の用法

(38) 妻を求むるには、上臈は品をもえらぶべし。(五ノ七 一九二頁)

(39) 南都、林懷僧都、京へのぼられる時、木津の人の家にして、鮮魚を求めて食す。  
(七ノ十一 二九八頁)

例(38) (39)における「妻を求める」「鮮魚を求めて」は動詞用法である。十訓抄には「求ム」の用例数は多いが、用法はこのような単純な動詞用法のみが見られる。

## 9、「誂フ」の用法

(40) 時の英才、斉名、以言らにあつらへしむといへども、なほ心にか  
なはず、  
(七ノ九 二九六頁)

(41) 「さばかり貴き人の、かくねんごろにあつらへ給ふことなり」と  
思ひて、  
(十ノ七十二 四七一頁)

例(40)は「辞表をお出ししたくて時の英才である斉明、以言に頼んで、

作ってもらったが」、の意、例(41)は「熱心に依頼なされた」の意と解され、動詞用法である。

## 10、「庶幾ス」の用法

「庶幾」は一例見られる。ただし、説話の文中ではなく、第十編の標題に用いられている。

(42) 才芸を庶幾すべき事

(十の標題 三八五頁)

例(42)は「才芸を願うべき」の意で、動詞用法である。

## 11、「バヤ」の用法

(43) 「われ生けりとてかひなし。最後に一矢射て、死なばやと思ふ。  
弓矢の道はさこそあれ。男ども」などいひければ、

(一ノ六 三四頁)

例(43)は会話文における例で、「最後に一矢を射て死にたいと思う。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。「ばや」で言い切らず、「ばやと思ふ」の形で用いられている。

(44) 大臣、うち笑みて、「棹さげて、参らばや」とありける、いと恥  
づかしかりけり。  
(二ノ四十 八四頁)

(45) 「しかるべく候はば、これにて鐘などをもつきて参らせばや」と  
いふ。  
(七ノ二十三 三一八頁)

(46)「今はただ、品良くおはしまさむ僧などを知る人にて、過ぐさばや」と候ひて、  
(七ノ二十四 三二二頁)

(47) 顕基中納言の、つねは「罪なくて、配所の月を見ばや」といはれるには似給はず。  
(九ノ四 三七五頁)

(48)「さだめて伝へられたるらん。一見せばや」と仰せごとあり。  
(十ノ一 三八七頁)

例(44)～(48)も会話文における用例で、「棹をさげて参りたい。」「鐘をついていたい。」「日を過ぎたい。」「月を見たい。」「一度見たい。」の意と解され、いずれも例(43)と同様に話者の「願望」を「表出」する用法である。ただ、例(43)の「ばやと思ふ」と異なり、これらの例はいずれも言い切りの形で用例である。

(49) 思ひあれば袖に蜜をつつみても いはばやものをとふ人はなし  
(十ノ四十 四三二頁)

例(49)は和歌における用例である。「いはばや」は「伝えたい」の意で、これも「願望」を「表出」する用法である。和歌における用例はこの一例のみである。

即ち、十訓抄における「ばや」の全用例七例のうち、六例は会話文に、一例は和歌に用いられている。また、七例のうち、一例は「ばやと思ふ」の形で、六例は言い切りの形で用いられている。用例七例いずれも「願望」を「表出」する用法である。

## 12、「モガナ」の用法

(50) 法の月久しくもがなと思へども さよ更けぬらし光隠しつ  
(四ノ一 一四九頁)

(51) 今はただ思ひ絶えなむとばかりを 人づてならでいふよしもがな  
(五ノ十一 一九七頁)

(52) ふるさとへ行く人もがな告げやらむ 知らぬ山路にひとり迷ふと  
(七ノ三十二 三四七頁)

例(50)～(52)は和歌における用例である。例(50)は「仏法の月は永遠にあり続けてほしいと思っていたが、」の意、例(51)は「直接あなたに言う手立てがほしい」の意、例(52)は「ふるさとへ行ってくれる人がいてほしい」の意と解され、他者に対する「希求」を「表出」する用法である。

(53) おのおの興あるあらしひのうちにも、「よくもがな」と心を尽せる気色、をかしかりけるに、  
(七ノ十五 三〇四頁)

例(53)は心話文における用例である。「返事が良くあってほしい」の意と解され、これも「希求」の「表出」である。即ち、十訓抄における「もがな」は和歌と心話文に用いられ、いずれも「希求」を「表出」する用法である。

## 13、「テシガナ」の用法

(54) ことといはばあるじながらも得てしがな ねは知らねどもひきこ

例(54)は和歌における用例である。「琴の曲をお布施にくださるのならば、その琴の主も一緒にいただきたい」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(55) 秦の昭王、「いかで、この玉を得てしがな」と思ひて、

(七ノ二十五 三二七頁)

例(55)は心話文における用例である。「なんとしても、その玉を手に入れたものだ」の意と解され、これも「願望」を「表出」する用法である。即ち、十訓抄における二例の「てしがな」は和歌と心話文に用いられ、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

14、「ナム」の用法

(56) 月夜には来ぬ人待たる かきくらし雨も降らなむ恋ひつつも寝む

(七ノ六 二九四頁)

例(56)は和歌における用例である。「雨が降ってほしい」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。十訓抄における「なむ」はこの一例である。

15、「マホシ」の用法

(57) 「ただし、釈迦如来の靈山にて、説法し給ひけむよそほひこそ、めでたかりけめと思ひやられて、朝夕、心にかかりて見まほしくおほゆれ。そのありさま、まなびて見せたまひなむや」といふ。

(58) 「俊頼、一首詠ぜまほしくおほえしに、女房の舟のうちに忍びたる声にて、」

(二ノ十二 四六頁)

(59) 「今年、孫にて候男の、内藏寮の大使にて、祭を渡り候ふが、あまりに見まほしくて、ただ見候はむには、人に踏み殺されぬべくおほえて、やすく見候はむために、札をば立てて侍る。」

(一ノ二十八 七〇頁)

例(57) (58) (59) は会話文における用例で、いずれも連用形で用いられている。例(57)は「釈迦が靈山で説法をなさる様子をいつも見たいと思つている。」の意、例(58)は「自分は一首を詠みたいと思つていたが、」の意、例(59)は「どうしても見たくて、」の意と解され、すべて「願望」を「説明」する用法である。

(60) 聞こしめさまほしう思しめして、

(四ノ三 一五七頁)

例(60)は地の文にある例で、連用形ウ音便の形で用いられている。「院が知りたいと思ひになられ、」の意と解され、三人称の「願望」を「説明」する用法である。

(61) なにごとをも始むとならば、底をきはめて、かやうのしるしをもあらはずばかりにぞ、せまほしけれど、かかるためし、いとありがたし。

(十ノ六十九 四六七頁)

例(61)は地の文における用例で、已然形で用いられている。「このようになりたいものであるが、」の意と解され、これも「願望」を「説明」する

用法である。

(62)「世にあらば、かやうなるものをこそ、この世の思ひ出にもせまほしけれ」といふ。  
(四ノ三 一五三頁)

例(62)は会話文における用例で、已然形の結びで用いられ、「あのよ  
うな女を今生の思い出にしたいものだ。」の意と解され、「願望」を「表出」  
する用法である。

(63)世をも人も恨みけるほどならば、かくこそあらまほしけれ。

(九ノ七 三八二頁)

例(63)は、已然形の結びで用いられる。「世の中も人も恨むというの  
であれば、こんなふうにあつてほしいものだ。」の意と解され、「希求」  
を「表出」する用法である。

即ち、六例の「マホシ」には「願望」の「説明」の用法は四例、「願望」の  
「表出」の用法は一例、「希求」の「表出」の用法は一例それぞれ見られる。

#### 四、おわりに

以上、十訓抄における希望表現の構成及びそれぞれの使用状況を考察  
した。十訓抄は作者の編集方針によって、全体的に文章は平易であり、  
堅い漢文の直接引用が少ない。希望表現に関しても同様な傾向が見られ  
る。

まず、希望表現の構成を見ると、希望の意味を表す名詞には「願」「欲」  
及び「願ヒ」「望ミ」「祈リ」、動詞には「願フ」「望ム」「祈ル」「乞フ」「請」  
「求ム」「アツラフ」「庶幾ス」「起請ス」「ホシガル」、形容詞には「ホシ」、  
慣用形には「ムト思フ」「願ハクハク」、終助詞には「バヤ」「モガナ」「テ

シガナ」「ナム」、助動詞には「マホシ」が見られる。

そのそれぞれの用法を見ると、名詞「欲」は「欲望」という意味を表し、  
「願」は仏教の概念を表す熟語形式で用いられる。動詞には「祈ル」のよ  
うな基本的な動詞用法、「祈リ」のような連用形名詞法、「起請ス」のよ  
うな熟語形式という用法が見られる。形容詞は「ホシ」一語のみで用法  
は単純である。

慣用形式の「ムト思フ」は「願望」を表すが、「願ハクハク」は文末の  
動詞命令形(給へ)と呼応して「希求」を表し、「ム」と呼応して「願望」を  
表す。

終助詞・助動詞は主に会話文と和歌に存在し、地の文における用例は  
少ない。意味的には「バヤ」「テシガナ」「マホシ」は「願望」を表し、「モ  
ガナ」「ナム」「アラマホシ」は「希求」を表す。

以上から見られるように、十訓抄における希望表現の中核は慣用形式  
と終助詞・助動詞形式の和語が中心であり、名詞・動詞形式は周辺の存  
在である。

#### 【主要参考文献】

「十訓抄解説」 浅見和彦 小学館新編日本古典文学全集51『十訓抄』所  
収 二〇〇七年八月  
『日本古典文学大辞典』第三卷 岩波書店 一九八四年四月第一刷

#### 【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教  
育学部研究報告第一部第109号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大辞典』第三卷 岩波書店一九八四年四月第一刷

(4) 『十訓抄』 浅見和彦校注 小学館 新編日本古典文学全集51

二〇〇七年八月一版四刷

(5) 用例の意訳はテキストを参照した。以下同。

(6) 注(2) 参照。以下同。

(7) 注(2) 参照。以下同。

(8) 注(2) 参照。以下同。

(9) 注(2) 参照。以下同。

(しばたししょうじ 香川大学教育学部教授)

(れんちゅうゆう 広島市立大学客員研究員)

(二〇一四年五月三〇日受理)